

一夜だけのハロウィン

普通野沙衣子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

10月31日。それはハロウインの夜。「ねえ、きみもひとり？」という声をかけられるところから始まる。これはふたりの恋の物語。

目次

一夜だけのハロウィン

「ねえ、キミもひとり?」

10月31日の夜のこと。

友達を誘って夜の街へ繰り出そうとしていたけど、揃いも揃って予定があるらしい、デートでもするのだろうか。

1人だからといって年に一度のイベント事だ、家に閉じこもっていいは損した気分になる。その空気を少しでも感じるため、私は夜の街へ歩きだした。

賑わっている所に来てみたのはいいが、1人ではその空気に乗れず、つかれてしまった。私は賑わいを避けて、ゆっくりできるような場所に来ていた。

そこでこの人に、話しかけられた。

「まあ、そうですね、1人です。」

「へえ、こんなところで何してるの?」

「なにをしてみるという訳でもないですけど、ちよつとした休憩です。」

「じゃあ暇かな?、少しお話でもしようよ。隣、座るね。」

ぐいぐい来るひとだなあ。

それからいろいろな話をした、年齢や身長、自己紹介で言いそうなお話はほとんど聞かれたと思う。それに私は淡々と答えるだけだった。定型文のような言葉をつらつらと。

私に何かを聞くたびに、自らのことも話してくれたので、私のことを知られたぶんだけ、この人のことも知ることができた、と思う

それと同時にどこかで会ったことがあるような、そんな気がしてきた、思い違いだろうか。

「昔話をしてもいい?」

「聞きますよ」

「ありがとう、今よりもずっと小さい時の話なんだけど。幼馴染みがいてね、その子とハロウィンに遊んでただけだし、楽しくて楽しくてたまらなかつただけけど、その日から今日まで一度も会えてないの。」

「何かあったんですか？」

「遠くにいつちやったんだ」

「それは寂しいですね」

「ほんとうにね…。」

さきほどまでとはうってかわって、とても悲しそうに話すこの人に、私はどう返答すればよいのやら。

そしてこの空気を変えるために話題を変えてみることにした。

「あの、後ろのこれ、やったことあります？」

「ああ、クレーンゲーム。あまり得意じゃないけど、キミは得意なの？」

「少しだけ。」

「よし、やってみようよ」

ガラスの向こうには、可愛らしくデフォルメされているコウモリや黒猫など、ハロウィンらしい人形が沢山。

「じゃあやってみるね」

表情ががらりと変わり、真剣だけど、楽しそうな眼差しでアームを動かしていた。

そして1回目、

「ああ〜！おしい！」

2回、

「あ、あとちょっと」

3回、

「ああ…。」

チャレンジの回数だけがどんどん増えていった。

「とれないなあ…。よし、交代。次はキミの番だ！」

「まかせてよ」

今よりも小さいとき、お小遣いをもらってはゲームセンターでクレーンゲームばかりをしていた記憶がある、むしろそんな記憶しかない。

そんな私に、1回でとることは簡単なことだった。

「まあこんなかんじです」

「まさか一発でとるなんて… ねえ、コツを教えてよ」
「もちろん」

吸収がはやく、取り方を少し教えただけでなのに、たったの2回でとることができていた。

そういえば、小さいときに同じように取り方を教えたことがあつたっけ、もうどんな子だったかはまったく覚えてないけれど、そのときは結構な回数を重ねて取っていたことを思い出した。

「本当にとれた！きみのおかげだよ！ありがとね」

満足してくれたようでよかった。

「これあげる、教えてくれたお礼に」

「ありがとう。じゃあこつちを、取れた記念に」

「こちらこそありがと… なんだか懐かしいな」

その顔は少しだけ寂しそうな、そんな表情をしていた。

「どうかしました？」

「なんでもないよ、ちよつと昔を思い出しただけ。それよりもさ、」

「さつきとは一転し、とても楽しそうな顔になっていた。

「ねえ、ハロウィンって好き？」

「どうかな… こういうお祭りみたいなのは好きかも」

「じゃあさ、ハロウィンしにいこうよ」

「ハロウィンしにいく？」

「そう、ハロウィンしにいくの、いろんな家をまわってお菓子をもらいにいくの、どう？」

「おもしろそうだね」

「よし、じゃあ決まり！さつそくいくよー！」

するとすぐに立ち上がり、駆け足気味で目的地まで歩いていく、見たことあるよあな、初めてのような、そんな道をいくつも通り、体力がなくなる前に到着することができた。

「じゃあここからいこっか！」

初めて見る家だった。

「知ってる人？」

「もちろん、キミもだけどね」

「えっ？」

「じゃあ押すよ」

「ちよつと」

そんな私の静止を聞いてはくれず、さつきとインターホンを鳴らし
てしまった。私が知っているとは一体どういうことなのだろうか、そ
んなことを考えている暇もなく、扉は開いた。

「はい、どちらさまで… あーキミはー！」

「あ、どうもこんばんは」

「おじいさん！はやく、はやくきてくださいー！」

「どうしたんだ婆さん… おお！キミか！体は大丈夫だったか！」

なんのことだかわからないけれど。

「ええと、元気です」

「そりや良かったよ」

私と夫婦との会話が始まった、少し話しただけでも人柄のよさが伝
わってくる。

そして、私は夫婦と会ったことがあるということ思い出した、私
が小さいときによく可愛がってくれていたことを。

この人も夫婦と面識があるんだと思い、その方を向いてみると、と
ても嬉しそうな、笑顔でこちらを見守っていた。

「そこに誰かいるのかい？」

「はい、ここまで案内してくれた人です、お二人も知っている人だと思
います」

なぜか夫婦は不思議そうな顔でその方をみつめていた、そしてなに
かに気がついたのか、その眼差しは温かいものへと変わり、目には涙
をうかべていた。

「… どうしました」

「いや、なんでもないんだ、ちよつとまってなさい」

そういうとおじいさんは家の中へはいり、何かがはいっている袋を
持ってきた。

「これ、持っていきなさい」

差し出されたのは袋いっぱいのお菓子だった。

「こんなにいっぱい、いいんですか？」

「もちろんだ、2人で仲良く食べてな」

「ありがとうございます」

「たくさんもらったね」

「そうだね、感謝しないとね」

「じゃあそろそろ次のお家にいこっか、いくべきところはあるからね」

「あなたは話さなくてもいいの？」

「うん、大丈夫、たくさん見せてもらったから」

「どういうことだろうか、疑問に思っていると夫婦が話し出した。

「二人とも、まだ行くところはたくさんあるんだろう？夜が明ける前にはやくいってきなさい。それと、うちにもまた来てな」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、いこっか！」

私たちはその後もいくつかの家をまわり、同じような反応をされ、最初は忘れてしまっていた人もいろんなことを話して思いだし、最後にはお菓子をもらい、久しぶりの幸せな時間を送っていた。

そして夜明けがせまっていた。

「ここが最後だよ。」

「……？」

「ここでもいいの」

「道路だよ？」

「わかってる、わかってるけど、少し時間がほしいの」

「もちろんいいけど」

すると、深呼吸を شدした。体を捻ったり、軽くジャンプしたりして、なにをはじめめるのだろうか。

「今から道路を渡るけど、キミはそこにいてね、絶対だよ、絶対。動かないで」

「いままでとは違う。なにかを決心したようなそんな感じ。」

「あのときは2人ともだったけど、今日は1人」

「あのとき、あのとき、いつのことだろう。」

「じゃあ渡るから、動かないでちゃんと見てて」

道路を渡り始めてしまった。車が来ているのにもかかわらず。

「まってー！」

あれ、なんだろうこのかんじ、同じことがあったような。

違う、あったんだ、思い出したんだ。やっと、

小さい頃のこと、

「はやくー！おいてっちやうよー！」

「ま、まってよー…。」

前を歩いているのがあの子、後ろで息をきらしているのが私。

「ちよつと… やすませて…。」

「もう、しょうがなあなあ。ねえ、きょうはどうだった？」

「もちろん、ほんとにたのしかったよー！」

「じゃあさ、つきも、そのつきも、つぎのつきも、いっしょにハロウィンしよ？」

「んしょ？」

「うん、ずっといっしょ。ふたりでハロウィンしようね、やくそく」

そしてこの直後、2人で横断歩道を渡ろうとしたとき、

「一緒に車にひかれたんだよ」

道路を渡ったはずのあのこが、私の後ろに立っていた。

私は辛うじて生きてはいたが、記憶を失ってしまった、でもそれで済んだんだ、私は。

だってあの子は、

「そういうの、今日は無しにしよう？」

「でも」

私は顔をあげたが、かすんでしつかり見えない。今のあの子を覚えたいのに、いくら拭いても、すぐにじんでしまう。

「空を見てよ、明るくなってきた。もう夜は明けるね。」

「いやだ」

私にはわかってしまう。つきにあの子が話すと終わってしまうことを、いやだ、いやだ。

「ねえ、今日はどうだった？」

言いたくない、言いたくはないけれど、言わなきゃだめだ。

「もちろん。楽しかったさ、ほんとうに！」

朝日が昇った。

街に昨日までの賑わいはなくなり、いつもの風景に戻っていた。おとといとは違ういつもの毎日が。

私は写真立ての前に、あるものを置いた。それはあの日に貰った人形と、あのときもらったにんぎょう。それと9本の薔薇を。

これらを懐かしいと思うとき、そのときは街に出て、賑わいをさけてゆつくりとできる場所へいこう。そうしたらまた誰かに話しかけられるだろう。